

溶解する民進党



理事・拓殖大学海外事情研究所准教授 丹羽文生

旧民主党の頃も含め、選挙敗北の度に「解党的出直し」を唱えてきた民進党だが、今や「解党的出直し」どころか「解党」寸前にまで凋落してしまった。ここ半年の間に、女性スキャンダルに舌禍事件と政権中枢による失態が相次いで起こっているにも拘わらず「安倍1強」が揺るがないのは何故か。

答えは簡単である。それは野党第1党の民進党が不甲斐ないからに他ならない。皮肉なことに「安倍1強」の支持基盤が民進党になっているのである。

東京都議選でも、鼠の如く多くの民進党の現職、元職、新人が沈みゆく泥船「民進号」から逃げ出し、「小池船長」が舵を取る最新クルーザー「都民ファースト号」へと乗り移った。こうした流れは国政にまで波及している。

この目を覆わんばかりの民進党墮落の原因とは何なのか。それは政党としての体を成していないという一点に帰着する。従来から指摘されてきたように民進党は玉石混合の寄り合いである。「保守主義の父」と言われるエドマンド・バークが政党を「その構成員が同意する特定の主義または原則において一致している人々が、国民的利益の推進に協力すべく結合した集合体である」と述べているように、本来、政党は同じ「特定の主義または原則」の下に仲間が集まってできるものであり、「烏合の衆」であってはならない。

名前も実に胡散臭い。「民進」は「国

民ととともに進む」という意味合いが込められていると言うが、そもそも「民進」なる言葉は辞書には載っていない。造語である。台湾にも民進党が存在するが、正式名称は民主主義と進歩主義を軸とするという意味の「民主進歩党」である。

造語を党名に冠するというのは前代未聞である。「名は体を表す」と言われるが、どうも「民進党」というネーミングからは、基本理念や行動原理が全く伝わってこない。

しかもメンバーの大半は、かつて旧民主党に三行半を出して脱党した人々である。言わば元の鞘に収まっただけである。

「綱領」の内容も曖昧模糊としたもので、抽象的な表現が目立ち、拳句の果てに「自由と民主主義に立脚」した国民党を標榜しながら、「社会主義・共産主義の社会への前進をはかる社会主義的変革」を目指す革新政党たる共産党と手を結ぼうとする。「選挙目当て」が先に立った「政策不在の野合」と言われても仕方ないのではないか。

20世紀のイギリスにおける政治学の権威であったアーネスト・バーカーは、野党とは本来、与党に対して「建設的創造」と「不断の批判」を提供することによってデモクラシーに生気を与える「刺激剤」でなければならないと喝破しているが、民進党は今や何の効果もない「偽薬」と化している。この際、思い切って「解党」し、勇気を持って政界大再編の捨て石となった方がいい。